

読書

今を
読み解く

編集委員
原田 勝広

冷戦構造崩壊後の地域紛争は内戦型で紛争当事者が複層的に入り組んでおり、政府のコントロールがきかないのが特徴。大国や国連主導の外交、政治的介入に限界があることから非政府組織(NGO)が果たす役割に期待が集まっている。緊急援助や難民帰還の実績があればこそだが、半面、前線での危険度も急速に高まっている。

国際協力の原点

高遠菜穂子「戦争と平和 それでもイラク人を嫌いにしない」(講談社、二〇〇四年)は四月、フールシヤ近郊でイラク人武装勢力に拘束された事件の顛末記だ。拉致、軟禁、そして解放から帰国後にいたる経緯がつつられている。周知の通り、素朴なボランティア精神が「自己責任」という言葉を揆んで、批判派と支持派の間でほんとうされた。彼女の行動は、安全対策を含め状況判断が十分で、国家の論理に寄りかかると本質を見誤らう。

マザー・テレサにあこがれる著者がなぜイラクでストリートチルドレンの世話をやることになったのか。なぜ、政治性を離れて特定の団体に属さず、ひとりNGOとして活動しようとしたのか。等身大の高遠像は、国際協力の原点を思い出させてくれるような気がする。かつては、国民国家だけが占

NGO、紛争地の活動は

めていた国際政治の舞台をNGOのような脱国家的主体が共有し始めていくとの問題意識のもとに書かれたジョセフ・S・ナイ・シュニア「国際紛争 理論と歴史」(原書第4版、田中明彦ほか訳、有斐閣、二〇〇三年)は示唆的である。ハーバード大学ケネディ行政大学院学長の著者は「多くのNGOは、個々の



国家権限を越え、あるいは国家が無視しがちな広範な公共の利益を代表して、「グローバルな良心」として行動しようとしている」とNGOの役割の重要性を指摘する。同時に、「インターネット時代にコミュニケーションのコストが低下したこと、ほとんど本部のスタッフなを持たないゆるやかな構造のネットワーク型組織や個人ですら、舞台上で登場できるようになった」と分析している。

日本のNGOの緊急援助は七年のインドシナ難民支援から始まった。国際社会から難民に対し日本は何もしない」と非難され、作家の大澤道子は「若者よ、カンボジアへ行こう」と呼びかけた。多くの若者がリュックひとつでカンボジア国境に駆けつけた。日本の老舗NGOの多くはこの時にできたものだ。今、国際社会からの批判はなかった。自衛隊の派遣も多かったが、実はイラクでは日本の多

高まる期待と危険度

市民社会、それを代表するNGO白頭の巨大なうねりには驚くべきものがあり、一人NGOはその波頭の一つといえる。

プロゆえの撤退も

吉田鈴香「アマチュアはイラクに入るな」(亜紀書房、二〇〇四年)は「プロのNGOは万全の装備で現地入りする」と危機管理の重要性を強調する警鐘の響である。紛争地でのNGOの援助のあり方を論ずる時に不可欠な視点を指摘しており、それなりに現実みがある。

ただし、現実みは単純ではない。国連や大手NGOの国際スタッフがアロウえに危険なイラクから素早く撤退する中、意外に健闘しているのが独立歩歩の小さなNGOだという皮肉。NGOの援助活動は統廃する紛争の中で大きなシレンマを抱えながら前に進もうとしている。



日本のNGOはイラクなどで活発な支援活動を続けている。イラスト:よしおか じゅんいち